



Title	アジア太平洋論叢 第9号 序
Author(s)	赤木, 攻
Citation	アジア太平洋論叢. 1999, 9
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99926
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

序

私は「世紀末」という言葉をあまり好まない。その最大の理由は、西暦のみを基準としていることにある。実際、タイやビルマなどでは仏暦が使用されていて、今年は2542年ないしは2543年であり、世紀末どころか世紀中である。つまり、世界中が「世紀末」でないことは確かである。ただ、100年とか500年を一つの尺度の単位として使用することを否定するわけではない。実際、いままさに直面している1999年や2000年も、100年の区切りよりも1000年の区切り、つまり「センチュリー」よりも「ミレニウム」として考察してみる方がおもしろいかも知れない。

20世紀が「戦争の世紀」であったとよく指摘されるが、事実であろう。とりわけ、二度の世界大戦を経験したことの重みは大きい。しかし、「戦争」をどうとらえるかにもよるが、手元にある世界史年表を一見しても、約1000年前の時代にも世界の東西で夥しい「戦争」が発生していることがわかる。人類と「戦争」がいかに密接な関係にあるかを知らされる。人間に生得的に備わった攻撃性が「戦争」の根源にあるという説は説得性に富むようにみえるが、「戦争」を行わない民族の存在の指摘もあり、この説も正解とは言えない。21世紀の末、いや2999年に、果たして人類は「戦争」を克服し得ているだろうか。いや、大量破壊兵器によるカタストロフィーなどにより、滅亡の危機に立たされているかも知れない。

『アジア太平洋論叢』(第9号)をお送りする。この号には、核をはじめとする「戦争」の現代的問題を扱った論稿3編をはじめとした会員の玉稿を収めている。また、海外からも貴重な投稿をいただき、うれしい限りである。読者諸氏の忌たんのない意見を歓迎する次第である。

1999(平成11)年3月

アジア太平洋研究会

会長 赤 木 攻